

「産科臨床現場としての行政」―病院の外にも「現場」があった―

独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA） 医薬品安全対策第一部 元木葉子

行政とはなぜ、時に現場感覚から遠いように見える判断をするのか――それが、私が行政で働くことになった原点の疑問でした。医学部卒業後、初期研修を経て大学病院で産婦人科医としてキャリアを始めた直後、産科診療に関わる報道に触れ、当時の病院勤務医であった私は大きな驚きを感じました。同時に、「なぜその判断に至ったのだろう」という疑問が頭から離れませんでした。

行政の仕組みを知りたい。そう考えていた折、大学院の講義で医薬品医療機器総合機構（Pharmaceuticals and Medical Devices Agency：PMDA）から講師を招いた特別講演を聴講する機会がありました。「先生方が日常診療で当たり前に使っている薬は、当たり前前にそこにあるのではない。製薬企業や行政が関わり、臨床現場へと届けられている。医療現場は病院の中だけでは完結しないのです」という言葉は、知っていたはずの事実を、私自身のキャリアを見つめ直すタイミングで改めて突きつけるものでした。

親族に医療関係者のいない家庭で育った私は、医師のキャリアといえばベッドサイドで患者さんに向き合う姿しか思い描いていませんでした。診察室、病棟、手術室でのパフォーマンスを高めることこそが医師の使命だと、疑う余地もありませんでした。大学では腫瘍の研究室に所属し、外勤先でお産を取り上げる忙しい日々のなかで、「病院の外」にどんな医療現場が広がっているのかを考える余裕もなかったのが正直なところです。

転機となったのは、大学院在学中に上司と参加した国際学会でした。特にヒトパピローマウイルス関連の学会では、行政、製薬企業、教育現場、地域社会の関係者が立場を越えて活発に意見交換をしていました。その光景を通じて、「ベッドサイドを支える周囲の環境すべてを含めて医療現場は成り立っている。診察室の外の環境を変えなければ、患者さんを守ることはできない」と、強く実感しました。この経験を経て、12年前からPMDAで勤務しています。

PMDAには、安全で有効な医薬品・医療機器を患者さんに届けるため、医師を含む多職種が協力して働いています。臨床経験を活かして活躍されている医師も多くいますが、産婦人科領域では、行政という医療現場で働くキャリアはまだ十分に知られていません。しかし、行政からの一つひとつのアクションは、日本全体の医療に影響を及ぼします。産科のベッドサイドがわかる臨床医が行政に関わり続ける意義は、今後も変わらないと思っています。

2026年現在、PMDAに在籍する産婦人科医として活躍できる場は多岐にわたり、これまでに自分関わった産婦人科診療を大きく変える多くの医薬品・医療機器を患者さんに届けてきました。今年、私がベッドサイドを主な職場として働いた期間と、行政の現場で働いた期間が同じになります。今も当直や外来を続け、臨床感覚を失わないよう努めています。また、公的研究費を得て、産科臨床と行政が協働する第一歩も踏み出しました。

「医師のキャリアは一つではない」。これは若い頃の私自身が、最も知りたかったことです。病院の外にも、確かに医療現場があります。もし今、少しでも視野を広げてみたいと感じているなら、その好奇心を大切にしてほしいと思います。ベッドサイドで培った経験は、どんな場所でも医療を支える力になります。

〔著者略歴〕 元木 葉子（もとき ようこ）

東京都出身

2002 年 奈良県立医科大学医学部医学科卒

2002 年 聖路加国際病院初期研修医

2004 年 横浜市立大学産婦人科に入局、横浜市立大学附属市民総合医療センター総合周産期母子医療センターを含む大学関連病院に勤務

2012 年 横浜市立大学大学院に進学

2015 年 独立行政法人医薬品医療機器総合機構に出向

2016 年 横浜市立大学大学院医学研究科生殖成育病態医学 博士号

2017 年 独立行政法人医薬品医療機器総合機構にプロパー職員として就職、現在に至る。新薬審査部、医薬品安全対策部、健康被害救済部を経て、現在医薬品安全対策第一部に所属。産婦人科診療に関わる医薬品・医療機器の審査相談業務に幅広く対応している。令和 7 年厚生労働科学研究費、令和 8 年 AMED 研究における研究代表者。

日本産科婦人科学会専門医、母性内科学会理事。ICH E21「妊婦及び授乳婦の臨床試験への組入れ」のトピックで本邦から Expert working group に Topic leader を務めている。

～DEI 推進委員会より～

好奇心を原動力にした挑戦

「医師のキャリアは一つではない」というメッセージが印象的でした。ご自身が若い頃に知りたかったことを、今の若い世代へ伝えようとされている思いが伝わってきます。「なぜその判断に至ったのだろう」という疑問や好奇心を原動力に、PMDA という立場から医療を支え、患者さんへ貢献してこられた歩みは大変示唆に富むものです。医療を支える場は病院だけではなく、多様なフィールドが存在します。また、臨床経験を持つ医師が行政に関わることで、現場の視点を社会全体の医療へとつなげていく重要性も改めて感じました。本エッセイは、自分らしいキャリアや医療への関わり方について考えるきっかけになるのではないのでしょうか。

責任編集
DEI 推進委員会